美を求める心・感想

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　s14778mm 松本倫明

解るものではなく感じるもの

ピカソ等の作品を見ると解り易いが、素晴らしい芸術といわれるものには、何を描いているのかさっぱり解らないものが多い。しかし美しいものは解ることではなく、どのように感じるかということに関わっている。そしてここには(詩のように洗練されたものを除いて)言葉は必要ない。

このことは鼻を眺めるときのことを思い返すと、私には凄くよく解る。花を見ていると、周りの人が奇怪な行動にでていることに疑問を持つ。

2015年、春、京都駅の近くにある梅小路公園にたまたま立ち寄ったので美しい梅を見て回った。一本一本の木を見ていくと、花には花の、蕾には蕾の、何ともいえない感じが身に染みてきた。あえて言葉にするのだが、花からは何かふわふわした空気のようなものが流れ出している感じがした。蕾からはこれから外へと飛び出そうとする我慢というか、もどかしさというか、貯まりに貯まったエネルギーを感じた。

花にも蕾にも何ともいえない力があった。しかし多くの人はまだ蕾の木はすっとばして、花咲く木の周りで屯し、写真を撮るなり、連れ添いと話し合うなりしていた。なぜ蕾はすっとばすのか。それは予め蕾と花を区別してしまっているからだろう。区別を排して純粋に眺めれば、もっと美を感じられるだろう。私ももっと純粋な見方を身に付けたい。

美を写真で鑑賞できるのか

観光客にとって、花や建築物を写真に収めることは必須であろう。しかしそれは美を求めることなのであろうか。『美を求める心』が記されたのは、昭和30年代のことであり、著者は誰でも写真を手軽に撮り始めることを意識していたかどうかは私には解らない。

著者にすれば、学問のように、「この花の色は何色で」「この建物は何々造りで」といった区別をすることに、美を求める観点からは否定的である。写真目当てでとりまくる前にじっくり観照することが重要だろう。そこで美を体感してから思い出のひとかけら程度に残しておくものくらいに、写真を認識しておくのがちょうどよいのではないだろうか。